

チベット探検

僧河口慧海の見た世界



The First Japanese Expedition to Tibet: What the Monk Kawaguchi Ekai Witnessed

ヒマラヤ山脈の北側に位置するチベットは、19世紀後半から20世紀にかけて、ユーラシア大陸に覇権を争ったイギリスやロシアの侵出を警戒し、外国人の入国を禁じていました。その一方で、政教一致の方針に基づき、生まれ変わりにより継承される転生僧ダライ・ラマが統治することから、知られざる仏教の聖地と捉えられ、世界各国から探検隊が派遣されました。日本からも仏教の源流を求める僧侶が競って当地を目指すなか、明治34年(1901)に日本人として初めて都ラサに入ったのは、現在の大阪府堺市出身の僧、河口慧海(1866~1945)でした。その偉業は旅行記によって広く知られるようになり、明治時代の日本にチベットブームをもたらしました。

注目されたのは旅行記だけではありません。帰国後に東京美術学校(現東京藝術大学)で開催した展示会は、人びとに驚きを与えました。その後、昭和48年(1973)に慧海コレクションの一部が姪の宮田恵美氏によって東京国立博物館に寄贈されました。本特集では、慧海が晩年まで手元に置いた遺愛の品を交えてご覧いただけます。寄贈から50年を記念して、慧海のまなざしを追体験していただく機会になれば幸いです。

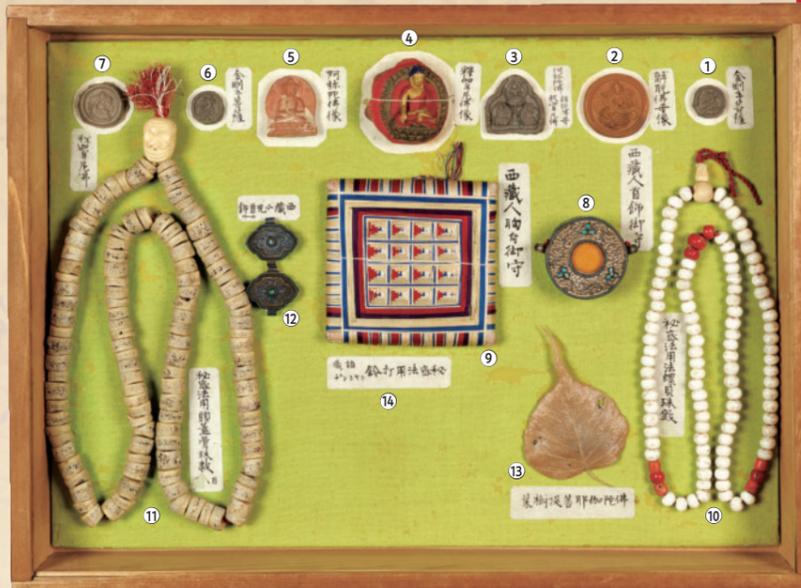
Nations around the world dispatched explorers to Tibet during the country's period of isolation in the 19th and 20th centuries. In the year 1901, the Buddhist monk Kawaguchi Ekai (1866-1945) became the first Japanese to enter Lhasa, the capital of Tibet.

Ekai's unprecedented achievements became known through his travel diary. The Buddhist sculptures and paintings that he collected also drew intense interest, as they shed light on Buddhism in Tibet, which people outside the country knew little about. The collection donated to the Museum by his niece, Miyata Emi, includes some of his beloved items, which provide glimpses of what Ekai witnessed in Tibet.

河口慧海 請来風俗資料

河口慧海請来風俗資料
Ethnographic Material Brought to Japan by Kawaguchi Ekai
19~20世紀 TJ-4834-11

仏法を求めた旅でありながら、インドやネパールなど旅の道中には現地生活用品や植物標本に至るまで慧海の関心は多岐にわたりました。女性用の装飾品や硬貨・鉱物、法具類を、自ら小札を貼り3箱に整理した風俗資料はその象徴といえます。帰国後、東京美術学校で展示された当時の状態で伝えられた品々です。以下、硬貨以外は「チベット」表記を省略しました。



- ①~⑦ サッチャ(粘土を型にはめて乾燥させた仏像)
- ① ナーローパ流のダーキニー ② ターラー-菩薩
- ③ 無量寿仏・仏頂尊勝母・白色ターラー-菩薩(長寿三尊) ④ 釈迦如来
- ⑤ 無量寿仏 ⑦ ターラー-菩薩 ⑧ 首にかけるお守り ⑨ 胸につけるお守り
- ⑩ 密教修法用の法螺貝の数珠 ⑪ 密教修法用の頭蓋骨の数珠
- ⑫ 子どもの首飾り(カーウ) ⑬ ブダガヤーの菩提樹の葉
- ⑭ 密教修法用のシンバル(ティンジャ)(亡失)



- ①~⑬ 各地の硬貨
- ① ネパールの偽造銀貨 ② ネパールの現行銀貨(裏)
- ③ ネパールの古銀貨(表) ④ 同(裏)
- ⑤ チベットの現行銀貨 ⑥ チベットの古銀貨
- ⑦ チベット ブランの銀貨 ⑧ ブータンの銅貨
- ⑨ チベット クンプ(現ネパール)の銀貨 ⑩ ネパールの銅貨
- ⑪ チベットラダック(現インド)の銀貨 ⑫ ⑬ チベットの銀貨
- ⑭ ⑮ ネパールの切手 ⑯ 鍵 ⑰ 認印 ⑱ 実印
- ⑲ 筆 ⑳ 箸・肉切り ㉑ 嗅煙草入れ
- ㉒ 銀の耳かき ㉓ 毛抜き ㉔ 厨子の象牙飾り
- ㉕ ダウラギリの聖地ムクティナートの化石
- ㉖ 尼連禪河(ニラージャーナ川)の石
- ㉗ 霊鷲山(グリドラクータ)の結晶石
- ㉘ 虎の爪 ㉙ 親指にはめる角製の指輪



- ① 女性の首飾り(ヤーチャンゼ)
- ② 女性の飾り(カーウ) ③ 女性の指輪
- ④ 女性の腕輪 ⑤ 女性の耳飾り(エーゴル)
- ⑥ 女性の飾り用の貴石とサンゴ ⑦ 男性の耳飾り
- ⑧ ヒマラヤ山中の女性の金帯(ケーラ)
- ⑨ ヒマラヤ山中の女性の耳飾り
- ⑩ ヒマラヤ山中の少女の金帯
- ⑪ チャンタン高原の少女の飾り用貴石
- ⑫ ネパールのバルゴ商人の女性の頭飾り
- ⑬ ネパールの女性の耳飾り

※No.2以外、すべて宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈 [謝辞]本特集においては、当館客員研究員の田中公明氏、石松日奈子氏に貴重なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。表紙/No.7 中面・裏表紙/図書102-943「河口慧海師得來西藏品図録」東京美術学校校友会編、明治37年(1904)



特集 日本初のチベット探検
—僧河口慧海の見た世界—
令和5年(2023)8月22日発行

展示企画・執筆:西木政統 撮影:藤瀬雄輔 翻訳:ミウォシユ・ヴォズニ(以上、東京国立博物館)
デザイン・制作・印刷:アイワード 編集・発行:東京国立博物館
©2023 東京国立博物館 Tokyo National Museum

河口慧海

職人の家に生まれながら、15歳のときに読んだ釈迦の伝記に触発されて黄檗宗の僧侶となりました。ベストセラーとなった『チベット旅行記』により、探検家のイメージも強い慧海ですが、終生戒律を守り、經典の和訳や布教活動にその生涯を捧げた仏教者でした。



1 西蔵服の河口慧海師肖像

Portrait of the Priest Kawaguchi Ekai
板・油彩 高村真夫筆 昭和6年(1931) P-2970

第12回帝国美術院展覧会(帝展)に出品された肖像画。1回目の旅行中に撮影された僧服姿の写真をもとに描かれました。
※本作品のみ本館18室で展示(9月12日~12月10日)。

河口慧海 略年表

和暦	西暦	年齢	事績
慶応2年	1866	1歳	1月12日 和泉国堺(現大阪府堺市)に生まれる
明治13年	1880	15歳	私塾にて漢学を学ぶ。釈迦の伝記を読む
明治23年	1890	25歳	3月15日 羅漢寺(当時黄檗宗)にて出家
明治26年	1893	28歳	このころ、チベット旅行を決意
明治30年	1897	32歳	6月26日 神戸を出国(第1回チベット旅行) 7月25日 インドの Kolkata 着、ダーズリンに滞在
明治32年	1899	34歳	ネパール領に入り、チベットを目指す
明治34年	1901	36歳	3月21日 チベットの首都ラサ着
明治36年	1903	38歳	4月24日 インドのムンバイを出国(5月20日 神戸へ帰着) 11月3日 将来品展示会(東京美術学校)
明治37年	1904	39歳	3月8日 『河口慧海師将来西蔵品図録』刊行 3~5月 『西蔵(チベット)旅行記』刊行 10月11日 神戸を出国(第2回チベット旅行) 11月3日 インドの Kolkata 着
大正3年	1914	49歳	8月7日 チベットの首都ラサを再訪
大正4年	1915	50歳	8月7日 インドの Kolkata を出国(9月4日 神戸へ帰着) 10月8日 将来品展示会(東京美術学校)
大正6年	1917	52歳	7月 『美術資料』印度之部・ネパール之部・西蔵之部刊行
大正14年	1925	60歳	2~5月 第1回中国旅行
昭和3年	1928	63歳	3~4月 第2回中国旅行
昭和8年	1933	68歳	10~12月 第3回中国旅行
昭和20年	1945	80歳	2月24日 脳溢血のため逝去



2 チョーマ・ド・ケーレス坐像

The Scholar Csoma de Kőrös
銅造 チョルバ・ゲーザ作 20世紀
フェリックス・バーリー氏寄贈 C-496

仏教を学ぶなかで漢訳經典に満足できなかった慧海は、近代チベット学の祖であるハンガリーの東洋学者アレクサンダー・チョーマ・ド・ケーレス(1784~1842)の伝記に導かれて、すでに仏教が衰退していたインドではなく、チベットへ行くことを決意します。後年、本作が日本へ贈呈された式典には慧海も出席しました。



5 釈迦如来坐像

The Buddha Śākyamuni
銅造、鍍金、金泥塗
18~19世紀 TJ-4834-5



6 五鈷鈴

Bell with a Five-Pronged Vajra
銅製 19世紀 TJ-4834-6

チベット

当時、チベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマ13世(1876~1933)の治世にあり、インドを植民地とするイギリスと、南下政策をとるロシアの対立のもと、鎖国体制が敷かれていました。慧海は幾多の困難を乗り越え2度の訪問を果たし、インドの經典を忠実に翻訳したチベット語經典から多くを学びました。



4 蓮華文磚

Brick with a Lotus Flower
土製 17~18世紀
TJ-4834-8



3 釈迦三尊像

The Buddha Śākyamuni with Two Attendants
石造 パーラ朝・9世紀
TJ-4834-14

インド

2度にわたるチベット旅行で、慧海は英領インドのダーズリンやヴァーラーナシーで諸言語を学びながら情報収集に努め、周到に準備しました。No.3は、東インドに多い玄武岩製の釈迦三尊像です。



9 無量寿仏像

The Buddha of Infinite Life
綿本着色 清時代・18~19世紀
TJ-4834-12

ネパール

慧海はネパール王国を経由しながら4年近くかけて首都ラサへ至りました。No.7は、光背や台座まで完備したネパールの木彫像として貴重です。

7 菩薩立像

Bodhisattva
木造、彩色
14~15世紀
TJ-4834-1



8 釈迦如来坐像

The Buddha Śākyamuni
石造、彩色 18~19世紀
TJ-4834-9



11 普賢菩薩騎象像

The Bodhisattva Samantabhadra Riding an Elephant
銅造、彩色
宋時代・12~13世紀
TJ-4834-4



10 塙仏如来坐像

Tablet with a Buddha
土製 北齊~隋時代・6世紀
TJ-4834-18



12 誕生釈迦仏立像

The Newborn Buddha Śākyamuni
銅造、漆箔
明時代・15~16世紀
TJ-4834-3



13 加彩女子

Woman
土製 唐時代・8世紀
TJ-4834-16

中国

亡命中の高僧バンチェン・ラマ9世(1883~1937)を訪ねるため、慧海は3度当時の中華民国を訪れました。No.10~12は伝統的に信仰されてきた大乘仏教の遺品です。No.9はチベットの軸装仏画であるタンカの様式で描かれますが、中国風の山水表現に加え、額装されていたこと、清朝の歴代皇帝・皇后の忌日を記した文書が付属することから、清時代に製作されたと思われます。

※出生日は旧暦です。